

言霊マスター講座 第2回

自修鎮魂法と空の世界

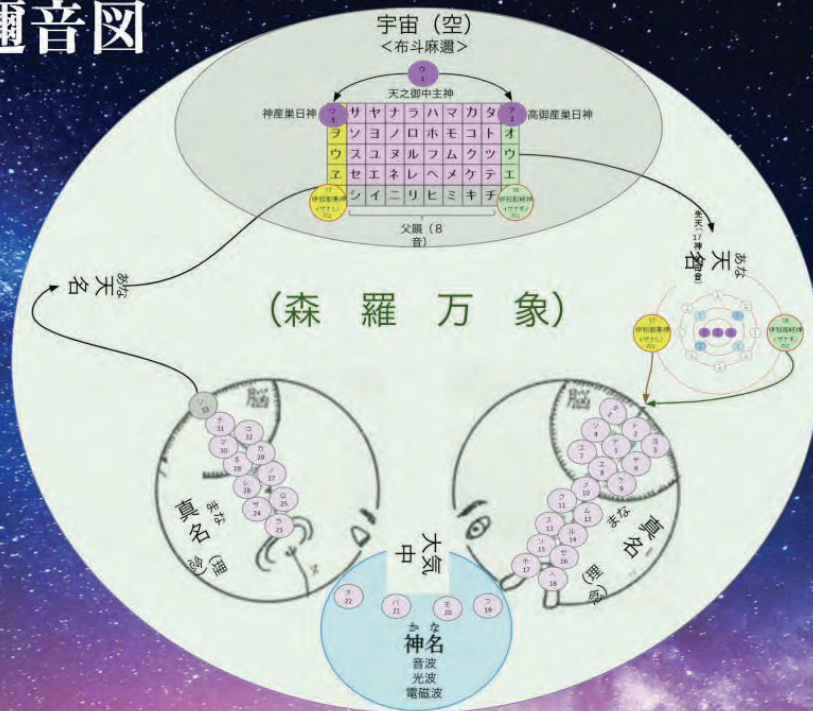
【講師】
石原政樹



自修鎮魂法

© 2024 neten inc.

布斗麻邇音図



© 2024 neten inc.

五階層

神

靈靈

魂

情

体

五魂

荒魂

和魂

幸魂

奇魂

精魂

自修鎮魂法

- 一、清浄な場所を選ぶ。
- 二、火打ちで身を清めます。(結界を張るとなおい)
- 三、右手親指と人差し指で太陽つくり、左手でつくった月の中にいれ、両手を丹田の下あたりにおきます。自分自身は地球を表しています。
- 四、呼吸を整えます。数を心の中で数えながら一から五まで喉が通る感覚を感じながら吸います。六から九まで息を止め、十から吐き切るまで、鼻の中を息が出て行く様を感じながら息を吐きます。一定の速度で数えることを心がけます。以上を三回繰り返します。
- 五、「われ(私)は、天御中主神(あめのみなかぬし)の御末の御子(みすえのみこ)なり。遊離の五魂わが中府(ちゅうふ)(おなかの真ん中のこと)に鎮(しず)まりませ」と、思念し、自修鎮魂に入ります。
- 六、自修鎮魂の間は、頭の中が「空」になるよう心がけます。目は半眼で、一メートル程度先においた対象(黒曜石など)を注視します。その間二十九分。
- 七、終わりに一礼し、天御中主神に感謝して終了します。

© 2024 neten inc.

自修鎮魂と創造のパラダイム

「われは、天御中主（あめのみなかぬし）の
御末（みすえ）の御子（みこ）なり。

創造のパラダイムにおける創造意志発動の一点が
天御中主神です。その一点から流転して生まれた
この現象界における私は、天御中主神の「子」であ
るのです。

自修鎮魂と創造のパラダイム

遊離の五魂

- そして、その子である私は、
「カオス」である現象界を生きています。
そのカオスを「再統合」し、
再び天御中主神＝宇宙創造意志と一体化するために、
「五魂」を中府、すなわち丹田に統合します。

© 2024 neten inc.

自修鎮魂と 創造のパラダイム

「わが中府に鎮まりませ。」

さらに、太陽、月、地球の三点を表すように
印を組むことで、現実創造の基となる、
魂の器を育てます。

© 2024 neten inc.



鎮魂の素晴らしさ

- ・ 世界を最適化する
- ・ 無限のプラスと無限のマイナスを含んだゼロを体感できる
- ・ 非ローカルなコミュニケーション
- ・ ログストーン場が整うことで、舞うように活動できる
- ・ 言霊の発動を実感できる

© 2024 neten inc.

祓いと鎮魂

祓いと鎮魂の両輪

- ・ 自分自身が祓い、清められることで、
ゼロポイント＝中今の状態を創りだす。
- ・ 鎮魂された状態になり、自分自身が宇宙、自然、神と一つになる。
- ・ 自分自身の中で、宇宙、自然の働きを最大限発揮できる状態。
- ・ その働きを自分以外のものへ向けることができる。
- ・ 「私」から「公」への転換ができる。

© 2024 neten inc.



鎮魂石とは、「自修鎮魂」をする為の石です。
旧約聖書において、ノアの方舟が漂着した場所
として有名なアララト山。

その麓にあるアルメニア共和国から取り寄せた
黒曜石を、山梨の伝統工芸士が
一つ一つ丁寧に研磨しています。

© 2024 neten inc.

なぜアルメニア産！？

アルメニアと日本、さらには山梨県には数多くの共通点があることがわかりました。両国ともに建国が古いということが挙げられます。

また、アルメニア人が信仰してきたアララト山にはノアの方舟伝説があり、ユーラシアの端の日本の富士山には、「白い山の信仰」があります。さらに、日本の大本教の物語の中には、クニトコタチノカミ、スサノヲがアルメニアに行き、そこから世界に旅立ったとされている点など、多くの興味深い関係性があります。

その一 聖なる山

これは、アルメニアの聖なる山とされるアララト山と、日本の聖なる山とされる富士山を比較した写真です。手前に湖が広がっているか草原が広がっているかの違いだけで、風景は大変似ています。

さらに、周辺でブドウ栽培が盛んな点も共通しています。



アララト山



富士山

© 2024 neten inc.

作法

© 2024 neten inc.

～火の力が、邪気を祓う～ 十種神寶刻印 白川学館の火打石

© 2024 neten inc.

火打石



© 2024 neten inc.

「日本書紀」には、ヤマトタケルノミコトが
火打石によって野に炎を放って敵を攪乱し、
難を逃れた等の神話が残っており、
古来、火には呪術的な浄化の力があることを
知っていました。

© 2024 neten inc.

切り火

切り火は火打石で火花を打ちかけるもので、厄を祓う日本古来の風習です。邪悪は火を大変嫌うので、切り火をすることで不浄を断ち邪気を祓います。厄除け、清め、祈願成就に、また外出時の無事安泰を祈る意味で用いられます。切り火のやり方は、右手に火打石を持ち左手に火打鎌をなるべく水平にして持ちます。火打鎌はあまり動かさず、右手に持った石の角で火打鎌の縁を削り取るように勢いよく前方に向かって打ち付けると、幾筋かの火花がはじけ飛びます。この火花を清めたい場所や出かける人の後ろから右肩口に2～3回カチカチと打ちかけるのが正式な作法です。

※ 火花が出ますので、燃えやすいもののそばでのご使用は厳禁です。
また、石の破片が飛び散る場合がございます。
その場合は、必ず拾ってケガなどないようにご注意ください。

© 2024 neten inc.



© 2024 neten inc.

白川学館の祓い作法でも使われている、メノウと、
火打ち鎌のセット。火打ち鎌は、
四百年の歴史をもち、かつては
水戸の黄門光圀公が特にその優れた品質を賞され、
愛用されたという吉井本家作。

© 2024 neten inc.

火打ち鎌

吉井本家の火打金は、武田信玄の家臣が上州吉井の在に刀鍛冶となった時、その妻が内職仕事に創り出したものが縁起となってこれが江戸で評判になり、火打金は吉井の火打金でなくては火がでないと言われるようになり、以来、「上州吉井仲之家女作」と刻印され、火打金の製法は連綿として、本家吉井の子孫にうけつがれ今日に伝えられております。切り火は、不浄を断ち、邪を払い、外出時には、無事安泰を祈る意味で用いられるものです。この慣習は今でも神官、僧侶、修験者、信者や、芸術家、芸能人、勝負事に関係のある職業の人、危険な業務に従事する人などの間で行われています。特に神社や仏閣では、御浄具として不可欠の道具とされています。



© 2024 neten inc.

白川学館 御用達

火打石



十種神寶
(とくさのかむだから)



十種神寶は、霊器として祭祀に用いられ、瀛津鏡(おきつかがみ)・辺津鏡(へつかがみ)・八握剣(やつかのつるぎ)・生玉(いくたま)・足玉(たるたま)・死返玉(まかるがへしのたま)・道返玉(ちがへしのたま)・蛇比礼(をろちのひれ)・蜂比礼(はちのひれ)・品物比礼(くさぐさのもののひれ)と十種あり、鏡と剣と玉と比礼で、霊力が秘められ災いを祓い去ると信じられています。

十種神寶の秘図をデザインし、メノウ石にレーザー加工を施し、2面に描画しております。

© 2024 neten inc.

<伯家神道火打作法>

一.柏手 二回

二.火打に向かい合唱し「お清めください」という意志を向ける。

三.火打石 右手/火打鎌 左手

四.火打 九回

五. 柏手 二回

© 2024 neten inc.

物や他者を清める際の火打作法

- 一.身を清める火打作法を行います。(前述の「身を清める際の火打作法」を参照。)
- 二.再度「身を清める際の火打作法」の「一」を行い、火打石を手に取り、清めたい物や他者に向かって、切火を行います。この際も、前述のように三回を三度、合計九回の切火を行います。
切火の際、清める意志を発し、物や他者を清めます。
- 三.火打石を置いて、拍手を二回行い、最後に一礼をします。

© 2024 neten inc.